

飼育展示の歩み

動物園の根幹は飼育と展示であり、それは動物の収集と飼育の実践からなります。50年間の飼育展示は、園の経営状況、動物の入手、飼育や展示の技術、飼育環境、来園者からの評価のほか、野生動物の絶滅や感染症など多様な影響を受けてきました。

1973年の開園時の飼育展示は8ページに記載したように物足りなさがあったようです。トラやチンパンジーなどを展示していた総合動物舎の当時の飼育環境は鉄檻とコンクリート床であることに加え、チンパンジーの隣室で猛獣が暮らすなど、今考えるとよい環境とはいえませんでした。飼育することで精一杯の時代だったのかもしれません。

展示内容充実のため、開園の数年後からシマウマ、カンガルー、タンチョウ、ニホンザル(サル山)など、動物の収集に懸命に力が注がれました。開園10年目の1983年には動物数は112種520点に増えました。

さらに市制100周年記念事業で1991年にゾウとキリンが加わり、開園20年目の1993年の動物数は110種533点となり、数字上の変化はあまりありませんが、大型動物の導入によって飼育状況は一変しました。飼育レベルを上げるため飼育の技術職員の採用もされ、作業量も大きく変わりました。1997年の「ふれあいランド」の完成で大型水槽でのペンギン展示、カピバラや希少種のレッサーパンダも導入され、現在の主な飼育動物がほぼそろいました。



大型水槽でのペンギン展示

動物収集のための動物の移動に関わる制約や規制は1990年頃まではそれほど厳しくなく、他園や動物商との動物交換や購入が盛んに行われていた時代でした。その後、野生動物の絶滅が広がり、ワシントン条約批准や種の保存法成立などが相次ぎ、動物収集は次第に難しい時代に入り始めました。日本動物園水族館協会(JAZA)は展示動物の入手困難な時代を見据え、動物確保と野生動物保全への寄与も意識し委員会を立ち上げ、1990年後半には飼育下での個体群維持などの議論を始めています。



初めて繁殖したカピバラ



開園当時の総合動物舎



ライオンやトラなどは檻越しでした



総合動物舎で使用していた檻の一部はヒトの檻として人気の撮影スポットに

開園から30年目の2003年の動物数は125種556点と大きく増えました。飼育経験や技術の向上はシロイワヤギ、ユキヒョウ、キリン、チンパンジー、イヌワシなどの希少動物等の繁殖に結び付けました。

ところが、開園から40年後の2013年の数は107種657点と種の減少が見え始めました。さらに園内で2016年に発生した高病原性鳥インフルエンザは鳥類の飼育に大打撃を与え、鳥類が38種から27種に激減、2017年の飼育動物数は96種579点となりました。50年目を迎えた2023年4月時点の動物数は93種544点です。



暑さに負けず生きたシロイワヤギ



高病原性鳥インフルエンザ発生により園内を消毒

児童動物園から 飼育が続いている動物



ライオン



クマ

アシカ

イヌワシ

2000年代の動物飼育は、環境問題と生物多様性の低下が重要テーマとして取り上げられ、これを背景に動物園は生息域外保全の役割の一端を担うようになりました。飼育動物は動物園間での共有財産的な感覚も出てきています。動物数減少の評価はまだ定まっていませんが、動物園で継続し繁殖できない動物種は姿を消す時代になりました。動物園の存続にも密接に関わる将来的な種の継代(種の保存)に関わる収集計画は大きな視点で捉えていく必要があることを教えています。

さらに動物園の飼育は動物の幸せ、福祉の視点で捉えることも求められるようになってきました。開園から30年以降に改修した「王者の森」「チンパンジーの森」「天空の楽猿」などは、そうした生活環境改善を意識したもので50年前とは大きく変わりました。動物に向けた社会の意識変化です。このように飼育の役割が高まる中、秋田市は2020年に動物専門員の採用を始めました。

飼育種の歴史を具体的に見てみると、児童動物園から現在まで飼育が続いている種はライオン、カリフォルニアアシカ、ツキノワグマ、ニホンイヌワシです。さらに開園時から50年間継続して飼育されている種はトラ(亜種は変わるが)、チンパンジー、チリーフラミンゴ、フンボルトペンギンです。チンパンジーのボンタは開園当初から生き続け、子孫も残している大森山動物園の歴史を見てきた存在です。他にカンガルー、フタコブラクダ、ニホンザル、ノジロオマキザル、コモンマーモセット、ホンドテン、タンチョウ、マナヅルは40年以上、アフリカゾウ、キリン、トナカイ、ワオキツネザル、ミーアキャットは30年以上飼育が継続されてきました。これらは大森山の諸条件、環境にマッチした種といえるかもしれません。

これらの中で特筆すべきいくつかの種をご紹介します。

一つはニホンイヌワシです。1970年に鳥海山の麓で保護

大森山動物園開園当初から 飼育が続いている動物



フラミンゴ

ペンギン

チンパンジー



トラ

され児童動物園時代から飼育を継続しています。2003年には初めて繁殖に成功。その後も継続して繁殖し、50年以上も飼育している動物園は大森山だけです。繁殖個体は全国の動物園に分散されています。熱心な飼育員による人工授精の試み等の繁殖生態の解明、ローテーション育雛法開発でのヒナの育成率が向上し、人工育雛を活かした国内初の手乗りイヌワシの実践は普及啓発に貢献しています。2015年には環境省から保護増殖事業の確認認定証が授与され、2019年には野生生物保護功労者として環境大臣賞を受賞しました。JAZA内生物多様性委員会で当園はイヌワシの計画管理と猛禽類の事業調整を行っています。野生絶滅が危惧される中、秋田の動物園は野生復帰の場面の寄与も期待されています。



イヌワシの親子



イヌワシの模型を使って育雛する様子

キリンも大森山では特別な意識で飼育を続けてきました。多くの繁殖成績がある一方、健康管理が難しい動物で様々な苦い経験もしてきました。ハンドリングや診療等ケアの限界を感じた飼育員らがトライした「ハズバンダリートレーニング」は先進的な技術で全国の動物園から注目されています。このトレーニングにより採血等の検査や蹄ケアも可能になりました。2013年に市民ZOOネットワークからエンリッチメント大賞を受賞しています。



トレーニングによる蹄のケア



トレーニングで採血が可能に

このほか、国内動物園で初繁殖となったアナグマ、メンフクロウ、ジャッカル、ホンドテン、アネハツルは生態解明にも結び付きJAZAから繁殖賞を受賞しています。

また、国内動物園で飼育数が減っているアフリカゾウの子孫を残そうと2018年には仙台市八木山動物公園との間でメスを交換し、繁殖を試みる大きな取り組みを行いました。しかし、大森山のだいすけの死によって子孫を残すことはできませんでした。



メンフクロウ



ジャッカル



アネハツル



ホンドテン



2018年 仙台市八木山動物園、盛岡市動物公園との合同発表会

動物園飼育ではありませんが、2003年に秋田県自然保護課が県内各地のため池調査で大森山公園内の塩曳潟も調査し、絶滅危惧種の希少淡水魚のシナイモツゴとゼニタナゴが発見されました。それを機に秋田で淡水魚を研究する団体や地域の学校などと力を合わせ、ゼニタナゴの継続調査や園内展示などで保全啓発活動を20年間継続してきました。



花子(左)とだいすけ



八木山からきたリリー(右)とだいすけ

動物飼育と展示の継続には様々な苦勞と困難が伴いますが、そこで得た経験や知見、技術の蓄積は動物飼育と種の保存、さらに展示を通じた教育にも生かされ、野生や自然の理解、その保全にも結び付くものです。動物園の根幹にある飼育と展示は動物園の核心であり、存在意義といえます。



2004年 地元の小学生と一緒に塩曳潟を調査



ゼニタナゴ